を結へば、色をよくし光澤を出し、あしきにほひを去る也、

又むくの木の皮

細くきざみ煎じて髪を洗ふべし、髪の色を黒ふし、光澤を出す奇妙の方也、

〔女重寶記一大和詞〕一こぬかは　まちかね

〔醒睡笑二〕謂被謂物之由來

一なべて上臈がたには、さくぢといふを、禁中にはまちかねとかやもてあつかひ給ふ事、こぬかといふ言葉のえんにや、

○按ズルニ、本書ハ、元和年間ニ成リシモノナリ、當時小糠ヲサクヂトモ云ヒシヲ見ルベシ、

小糠

〔諢話浮世風呂三編下〕三歳ばかりの小兒を、留桶に入れておき、母親は片手で留桶のふちを押へ、右の手でぬかぶくろをつかひながら、〇略下

糠袋

〔都風俗化粧傳下身嗜〕湯をつかふ事幷にぬか袋の傳

毎朝湯を、つかふに至て熱湯にて顔を洗へば、顔にはやく皺を生ず、ぬか袋一名もみぢ袋と云をつかふに、顔につよくあてゝ洗ふべからず、顔のきめをそんず、〇略中

糠袋に用ゆる切れは、地のよき晒木綿、紅木綿の類、糸の細き木綿よし、藍ニ染たるか、又島の類のあらき木綿よろしからず、顔をあらすもの也、〇略中

糠は絹にてふるひつかふべし、其まゝつかへば、こゞめ交て顔をあらす也、餅米糠別てよし、肌の垢を去るは、紅の絹を手拭かぬか袋の上になりともあてゝ洗へば、垢よく落る也、

〔嬉遊笑覽二中服飾〕もみぢ袋　空穗隨筆、空にけふもみぢ袋や月の顔露牙といへるも、糠ぶくろをいふ也、汁をもみ出してつかふものなれば、さは名付たるにや、但し赤くなる意にいふか、もみぢ袋といふこと所見なし、さくぢ袋といひけんを訛りしなるべし、さくぢは糠なり、